

フリードリヒ・リストの「土地制度」論

——「ドイツ資本主義と土地制度」に関する

思想史的研究の一試論——

住 谷 一 彦

〔一〕 まえがき——問題の限定——

〔二〕 フリードリヒ・リストの「土地制度」論

一 初期リストの土地制度論

——「あらゆる工業の礎柱としての農業」——

二 後期リストの「農地制度」論（以上本号）

——「中産的農民」の理念像——

三 「農地制度」論の現実性とその限界

——「分割地農民」と「農民層分解」——

〔三〕 リストに残された問題

——ドイツ資本主義と土地制度——

フリードリヒ・リストの「土地制度」論

【一】 まえがき——問題の限定——

近代に独自の資本主義、すなわち、「市民社会を支配する資本関係の基本形態 Grundform des Kapitalverhältnisses」である産業資本⁽¹⁾（傍点引用者）の形成過程を解明するにあたって、その分析の視角をどこにおくべきかについては、現在ほぼつぎのように論点が整理されているごとくである。まず、その古典的な規定はマルクスによって与えられた。「商業的形態および利子形態は、（中略）産業資本よりも一層古いものであるが故に、産業資本は、その発生過程において、これらの諸形態をまず自らに従属、unterwerfen せしめ、それ自身の派生的なまたは特殊な諸機能に転化せしめなければならない。これらの旧諸形態を、産業資本は、自己の形成ならびに発生の時期において、見いだした。すなわち、産業資本は、これらを、前提として見いだしたのであるが、しかし、自分自身の設定せる前提としてではなく、また自分自身の生存過程の諸形態としてでもない。それは丁度そもその始めに商品を見いだしたが、しかし、自分自身の生産物としてではなく、また貨幣流通を見いだしたが、しかし、自分自身の再生産の一契機としてではなかったのと同様である。資本制生産がその諸形態を充分に発展せしめて支配的な生産方法になると、利子附資本は産業資本に支配せられ、そして、商業資本は単に流通過程より派生せるところの、産業資本そのものの一形態にすぎなくなる。しかし、独立した形態としては、この両者、すなわち、利子附資本と商業資本は、まず破砕されて、そして産業資本に従属せしめられなければならない」⁽²⁾（傍点引用者）。たしかに歴史的にみるならば、「商業ばかりでなく商業資本も資本制生産様式よりは古いものであって、商業資本は事実の上でいうと in der That 資本の、歴史的に最も古い自由な実存様式なのである」⁽³⁾。「この資本の実存のためには、（中略）単純な商品」および貨幣流通に必要

な諸条件以外には何らの条件も必要ではない。あるいはむしろ、単純な商品⁽⁴⁾、および貨幣流通が商業資本の実存条件である」(傍点引用者)。したがって、「商人資本によって媒介される諸々の極が商人資本にとって与えられたものであることは、それらが貨幣にとりまた貨幣運動にとつて与えられるのと全く同様である」⁽⁵⁾。「ただ一つ必要なのは、これらの極が商品として現存することであつて、(中略)商人資本は、それにとつて与えられた前提としての、これらの極——商品——の運動を媒介するにすぎない」⁽⁶⁾。ということとは、つぎの点に関連してこよう。すなわち、「商人資本の運動はG—W—G'であるから、商人の利潤は第一に、流通過程の内部でだけ行われる行為により、つまり購買と販売という二つの行為によつて取得され、第二に、最後の行為である販売によつて実現される。だからこれは譲渡利潤である。明らかに、純粹・独立の商業利潤は、生産物がその価値どおりに販売されるかぎり、不可能である。高く売るために安く買ふことが商業の法則である。だから、等価物間の交換ではない」⁽⁷⁾(傍点引用者)。それ故にまた、「商業利潤は詐偽瞞着のように見えるばかりでなく、大部分は詐偽瞞着から生ずる」⁽⁸⁾。まことに近代に独自の産業資本は、このような商業資本(および高利資本)とその社会的系譜を異にするものであつた。「ほとんど大部分の生産物が直接に自己需要に向けられていて商品に転化されていなくとも、社会的生産過程がまだなかなかその全体の広さおよび深さにおいて交換価値に支配されていなくとも、商品生産および商品交換は起りうる。(中略)かかる発展段階は、しかし、歴史的にはなほ大きく異なつた諸々の経済的社会構成に共通している。(中略)だが、資本については、趣きが異なる。その歴史的な実存諸条件は、商品流通および貨幣流通とともに決して存在しない。資本は、生産手段および生活手段の所有者が自分の労働力の販売者としての自由労働者を市場に見いだす場合にのみ発生するのであり、そして、この歴史的な条件は、一つの世界史を包括している。だから資本は、そもそもの最初から、社会的生産過程の

ひとつの画期、eine Epoche を告知するものである」(9) (傍点引用者)。この資本の歴史的な実存条件が作出される過程こそは、いうところの「資本の原始蓄積」として問題にされる過程であり、資本制生産様式に先行する封建制生産様式の解体をその歴史的前提として有する過程であった。そしてこの封建制生産様式の分解がどの程度まで商業によって生ぜしめられるかは、「さしあたり旧生産様式の堅固さとその内部編制に依存するものである。また、この分解過程がどんな結果を生ずるか、すなわち、どんな新たな生産様式が旧生産様式の代りに現われるかは、商業にではなく、旧生産様式そのものの性格に依存する。古代世界では、商業の影響および商人資本の発展はつねに奴隷経済に結果する。また出発点次第では、直接的生活維持手段の生産を目ざす家父長制的奴隷制度が、剰余価値の生産を目ざすそれに転化するにすぎない。ところが近代世界では、それが資本制的生産様式に結果する。この点からいっても、これらの結果そのものは、なお、商業資本の発展とは全く別の事情によつて惹き起された、ということになるわけだ」(10) すなわち、封建制生産様式の解体の度合は商業資本の発達度とは全く別の事情、その生産様式の堅固さおよび内部編制の如何、にもとづいていたのであり、マルクスはそうした封建制生産様式から資本制生産様式への移行が、つぎのようなかたちでおこなわれたことを指摘した。「封建制生産様式からの移行は二重の仕方でおこなわれる。生産者が商人兼資本家となつて、農業的自然経済に対立し、また中世的都市工業のツンフト手工業に対立する。これは現実には革命的な仕方である。さもないければ、商人が生産を直接的に占領する。後者の仕方でも歴史的には移行として作用するが、(中略)この仕方は、即自的にも対自的にも、an und für sich 旧生産様式を变革することはほとんどなく、むしろ旧生産様式を保存し、自己の前提として維持する」(11) (傍点引用者)。このマルクスによつて指摘された直接生産者が資本家になる現実に革命的な移行の仕方については、その後レーニンによつて明確な理論的定式化がなされた。レー

ニンは、この直接生産者が資本家に上昇していく径路が歴史必然的に惹き起されるのは、いったいどのような歴史的諸事情のもとにおいてであるかという問題を理論的に整理して、つぎのように構想した。すなわち、「資本主義の歴史的発展においては、二つの契機、(一)直接の生産者たちが営む現物経済の商品経済への転化と、(二)商品経済の資本主義経済への転化、が重要である。第一の転化は、社会的分業——孤立分散した、「注意、これが商品経済の必須条件」、個々の生産者たちがただ一つの産業部門に従事して専門化すること——があらわれることによって、おこなわれる。第二の転化は、個々の生産者たちが、おのおの単独で市場のために諸商品を生産し、競争の關係に入ることによって、おこなわれる。各生産者は、より高く売り、より安く買おうとつとめる。その必然的結果は、強者の強大化と弱者の没落、少数者の富裕化と大衆の零落であり、これが独立生産者たちの賃金労働者たちへの転化と多数の小経営の少数の大経営への転化に導くのである」⁽¹²⁾(傍点原文)。レーニンがここに指摘した二つの歴史過程こそは、小ブルジョア層の形成とその両極分解(いうところの「農民層分解」)であり、マルクスのいわゆる「現実に革命的な」移行の過程を示すものにはかならなかつた。しかも、レーニンはこの場合に、さらにたちいつてどのような事情のもとで小ブルジョア経済が広汎に成長することが可能であるかという問題に対して、資本主義発展の必然性を隔地間分業から導きだそうとするクラシンの見解を強く否定し、「共同体内分業」の展開から共同体 *Gemeinwesen* の崩壊、階級分化が結果してくる事実を指摘する⁽¹³⁾。ところで、マルクスおよびレーニンによつて理論的整理のなされた、この資本制生産様式の成立を共同体内分業の発達→共同体の崩壊と小ブルジョア経済の発展→その両極分解として理解する学説とは、少しくニュアンスを異にし、また全くちがった方法的視角からではあるが、この問題にたいして独自の理解を示した学説として、マルクス・ウェーバーの⁽¹⁸⁾があげられる。彼は前近代諸社会の生産的土台をかたちづくっているものが共同体であるこ

とを指摘し、このような共同体を経済単位として社会が編制される場合、必然的に経済・倫理の二重構造が現象せざるを得ないことを強調する。したがって、彼の資本主義成立史を解明する分析視角は、この経済・倫理の二重構造揚棄の諸条件を検討することにおかれる。その場合彼がとくに重要視するモメントは、局地的の「共同体内的分業の展開」という事態であり、封建制生産様式としての封建的共同体の崩壊は、「他の多くの要因もさることながら、基本的には農民の『経済的成長度』と——それと相表裏することだが——局地的商品交換 lokale Verkehr⁽¹⁵⁾ すなわち、独立の工業と都市の営利生活一般、およびそれによって与えられる農民生産物の局地的販売可能性 lokal Absatzchancen の展開度に依存するのである。」ウェーバーは、このように封建社会の生産的土台である共同体組織を下から揺さぶり、これを崩壊させつつ広汎に成長してくる小ブルジョア層を、それもその内部から絶えず上昇しつつある部分を分出するような小ブルジョア＝ブルジョア層を「向上しつつある産業的中産者層」⁽¹⁶⁾ die aufstrebenden Schichten des gewerblichen Mittelstandes とよび、この社会層こそは中世封建社会から近代資本主義へ移行する場合の「必要な経過点」として、いわばその移行を媒介する歴史的役割を果すものとみなしたのであった。⁽¹⁷⁾

以上、われわれは資本主義成立史を問題にする場合の分析視角はどういう点に向けられるべきかについて、その理解に古典的な意義を有していると思われる学説を若干紹介してみたわけであるが、⁽¹⁸⁾これらの諸学説の示すところにしたがって、資本主義成立史（＝資本関係の形成）に関する基本的な論点を指摘してみると、こうである。すなわち、（一）封建的、自営農民の独立、自営農民（ひろくは小ブルジョア層）への転化。これは封建的自営農民によって構成されている生産の共同体組織が解体し、各直接生産者たちがその生産規制から解放されて個々に分立しつつ商品生産を営み始め、その結果局地的商品生産が根深く進展する過程であり、「共同体の解体」がひとつの基本的な論点をなしている。

(4) つぎに、かかる独立自営農民層の成長、彼らによる「自由な」商品生産の展開——いわゆる *Volksreichum* の成立——が、彼らの内部に新たな階級分化（「自由な」賃労働の成立）を惹き起しつつ、その中から産業資本が発生する過程。ここではいわゆる「農民層分解」(*Volksreichum* の解体、したがって *Kapitalreichum* の成立)がひとつの基本的な論点をなすことになる。一応このように論点を限定して、本稿のテーマについてみるならば、ほぼつぎのことがら
が問題となるであろう。

さきにあげたような資本主義成立史における基本的な論点である「共同体の解体」——「独立自営農民（ひろく小ブルジョア）の成立」および「農民層の分解」の歴史的過程は、一般に知られているようにイギリス・フランス・ドイツなどの資本主義諸国においてその様相および帰結を異にしているばかりでなく、それぞれに独自の再生産構造の基礎を形成している。そして、各国の資本主義にみられるこの構造的特質はそれぞれの国における経済学思想体系を根深く刻印づけており、その意味においてこの事情は、逆にこれらの経済学思想体系のなかに前述の「共同体の解体」もしくは「農民層の分解」の事実がどのように反映しているかを分析することによって、資本主義成立史研究に対する学史的あるいは思想的接近を方法的に可能とするであろう。⁽²⁰⁾ この場合、問題は二重の意味で困難さを提示する。というのは、このような方法は経済学思想体系に含まれているかぎりにおける「共同体の解体」、「農民層の分解」の事実を史料として提供しようとする意図をもつとともに、他面これらの文献ではその事実はこのような経済的基礎過程をどのように看るか、すなわち、ブルジョアの指導者としての階級的地位に応じたその視角からそれぞれ理論的に整理されて扱われているために、なほどこか歪められて反映されることになり、したがってその批判的検討なしには事実そのものを史料として提供し得ないという、いわば対象自体とそのなほどこか歪められた映像との両者を

同時に追求することを意味するからである。ともかく、このような困難さが方法上存在していることを確認した上で、本稿ではドイツ資本主義分析の経済学Ⅱ思想体系として古典的地位を占めているフリードリヒ・リスト Friedrich List (1789—1846) のそれを取りあげて、上述の論点について批判的検討を試みてみたいと思う。その場合、リストの思想体系において基礎的な位置を占めており、かつまた前記の論点について検討する上で最も好適な資料であると思われる彼の晩年の作たる「農地制度」⁽²¹⁾ Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung, 1842. およびそのなかで述べられている見解の原型を打ちだしていると思われる初期の論文「農地の無制限分割への反対論」⁽²²⁾ Wider die unbegrenzte Teilung der Bauerngüter, 1816. をとりあげることにする。なお、リストの数多くの文献のうちとくにこれを取りあげたのは、つぎの理由にもとづいている。というのは、「日本資本主義分析」の著者が、すでに明確に指摘しているように、「十八世紀中葉過ぎ以降の Absolutismus の場合にナポレオンの制圧下に余儀なくされた上からのブルジョア革命開始（一八〇八—一三年）を起点とし古手の『地方的プロシア的』三月革命（一八四八年）の後外見的立憲主義（一八四八—六六年）並に似而非ボナパルティズム（一八七〇年）の形態下に構成を備へるに至りし所の、ユンケル経済の支配と零細土地所有農民の局面とをもつ独逸資本主義」⁽²³⁾ は、ユンケル経済の支配（東ドイツ）と零細土地所有農民（西・南ドイツ）の二つの局面において土地制度と内面的連関を構成することによって、独自の構造に打ちだされているからである。本稿でこのような大きな問題をあつかうことは、もとよりとうてい不可能であり、ここではただ西・南ドイツにおける零細土地所有農民の問題を意識的にとりあげた点で古典的な前記のリスト「農地制度」論にもとづいて、「ドイツ資本主義と土地制度」の問題に対するささやかな思想史的研究をおこなってみるにすぎない。その意味では、本稿はあくまでも筆者が意図するドイツ資本主義分析の思想体系研究に

関するひとつの試論であり、またそれ以上のものでないことをつけ加えておきたい。⁽²⁴⁾

(注)

- (1) K. Marx, Theorien über den Mehrwert, herausgegeben von K. Kautzky, Bd. II, 1923, S. 541.
- (2) Ders., a. a. O.
- (3) Ders., Das Kapital, Bd. III, herausgegeben von Fr. Engels, S. 356. (インスティテュート版による)、長谷部文雄訳「資本論」(青木書店)第三部(一)四六一頁。(以下邦訳と略す)。
- (4) Ders., a. a. O. 邦訳、同四六二頁。
- (5) Ders., a. a. O., S. 357. 邦訳、同四六二頁。
- (6) Ders., a. a. O. 邦訳、同四六二頁。
- (7) Ders., a. a. O., S. 361. 邦訳、同四六七—四六八頁。ここでは長谷部訳を一箇所変更した。
- (8) Ders., a. a. O., S. 312. 邦訳、四六九頁。
- (9) Ders., Das Kapital, Bd. I, SS. 177—178. 邦訳、第一部(上)三二八—三二九頁。
- (10) Ders., Das Kapital, Bd. III, S. 364. 邦訳、第三部(上)四七一—四七二頁。
- (11) Ders., a. a. O., SS. 366—367. 邦訳、同四七四—四七五頁。
- (12) レーニン「いわゆる市場の理論について」(国民文庫版)二六—二七頁。この箇所的重要性については、すでに多くの論者によって、くりかえし指摘されているので、ここではたちいて検討を加えないでおく。
- (13) レーニンのこのような見解がどのようにしてマルクスの「資本論」から導きだされてきたのかという問題は、それ自体まことに興味深いものがあるが、ここではレーニンが示したいいわゆる「市場形成の表式」において封建的土地所有ばかりでなく共同体規制もまた捨象されたかたちで問題が展開されている事実に注目しておきたい。レーニンはこのような直接生産者の集団を一つの Gemeinwesen として規定しているが、それは歴史的にいつて果していかなるものと比定されるであらうか。ひとつの問題ではある。
- (14) ウェーバーの学説をかかる観点から把握したものとして、大塚久雄「資本主義社会の形成」(「社会科学講座」Ⅳ、Ⅵ所収、

弘文堂)があげられる。なお、以下に述べるウェーバーの見解については、拙稿「職業観念とその経済的基盤」(大塚久雄編「資本主義の成立」所収、河出書房)を参照されたい。

- (51) M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1924, SS. 510—511. 別の箇所では、中世末期と近代初期に至って西洋近代に独自の経済制度である近代資本主義が生じたが、その担い手である産業資本家層がどうして成立したのかを問題とし、それは一面では資本主義的工業を生み出すような市場の発展、他面では生産組織(自由な労働の資本主義的組織)の創出にかかわるものであって、結局において中世農民層の上向的な経済的発展に、しかもそれは、「当時都市の外部で根を下した封建的社会組織が……農民にあたえた生活諸条件の如何に依存する」(Ders., a. a. O., S. 263.)ものであったことを強調している。ここでは、彼は明瞭に初期の見解から脱皮している。

- (9) M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religions-soziologie*, Bd. I, 1947, Vierte Auflage, S. 50, 214. ウェーバーがここでとくに「その内部から上昇しつつある部分を絶えず生みだしているような」中産的社会層を「産業的中産者層」とみなしたことは、充分注目にあたいする観点である。このような条件を有さない中産的社会層は、たとえば後段で指摘するリストの場合のように、国家の手で維持されなければならないからである。

- (17) Ders., a. a. O., S. 50 Anm. 1. 「資本主義的企業の技術、および資本主義に生育力を賦与するのをねとする『職務』の精神との両者が、本源的に同一の社会層によって培養されねばならなかったという事実こそは——ここではこの点のみを強調しなければならない——先験的 *a priori* にはとうてい、認識し得ないものである。宗教的意識内容の社会的関連も、これと一致している。歴史上、『資本主義の精神』への教育を担当したものの一つはカルヴィニズムであった。(中略) オランダをはじめ他の地域でも、企業家としてようやく身を起しつつあった中小市民階級こそが、資本主義的倫理とカルヴィニズム信仰との担い手であったのだ。(中略)そして、この市民的産業的な労働の、合理的な資本主義的組織は、中世から近代への発展によって、はじめて生じたものである。」

- (18) もとより、以上の引用で論点のすべてが尽されているなどとは、とうていいえない。ただ、当面のテーマにとって必要最低限の基本的な論点が指摘されたにとどまる。

- (19) たとえば、その一例としてイギリス資本主義とスミスおよびスチュアート、フランス資本主義とケネー、シスモンディ、ドイツ資本主義とリスト、ウェーバーがあげられよう。

(20) すでにそうした方向に具体化された労作として、小林昇・内田義彦教授らの研究があげられる。それについては、とくに小林昇編「イギリス重商主義論」(御茶の水書房) 末尾における編者の言葉を参照されたい。

(21) この論文は、はじめ短縮されたかたちで *Deutsche Vierteljahrschrift*, Heft. 4, に掲載されたものであるが、最近のリスト全集、すなわち *Friedrich List, Schriften, Reden, Briefe, in Auftrag der Friedrich List-Gesellschaft*, 10 Bde. に至って、はじめて完全な姿に復原されて、その第五巻に収録された。本稿はそれによっている。なお、この論文は小林教授によって翻訳され、「世界古典文庫」の一冊になっている(「農地制度・零細経営および国外移住」、日本評論社)。

(22) *Friedrich List, Werke*, Bd. 1, SS. 580—584.

(23) 山田盛太郎「日本資本主義分析」(岩波書店) 序文参照。なお、この規定は最近改めてとくに小林昇教授によって重視されることとなった。小林昇「経済学史研究序説」(未来社) 所収の「東独のリスト」三三七—三三八頁参照。

(24) 筆者のそうした意図にもとづいて書かれた一つの習作として、「初期ウェーバーの資本主義成立史論」(「立教経済学研究」第十一の一、昭和三十二年六月) がある。なお、本稿におけるリスト研究は筆者のウェーバー研究の一前提として、顧みられている。

【二】 フリードリヒ・リストの「土地制度」論

フリードリヒ・リストは、しばしば「政治経済学の国民的体系」*Das nationale System der politischen Ökonomie*, 1841. の著者として、また発展段階説の提唱者として、その対主義的見解においてドイツ歴史学派経済学の先駆者と考えられている。だが、「政治経済学の国民的体系」は、リスト独自の政策、構想に裏うちされて展開されており、その発展段階説はリストの構想に発する貿易政策を正当化するための手段という意味を担っており、究極的にはアダム・スミスの「国富論」に展開されている世界を肯定している点で、スミスの世界観に包摂されているのである。⁽¹⁾ もとよりその点でもリストに独自の理解の仕方がみられないというのではないが、リストの全思想体系のなかで「国民

的体系」の占める位置は、一応それを支える政策構想の独自性の裡に求められるであろう。それはごく大づかみにいってみれば、大陸の独立諸国民の連合による対英防衛の構想であり、誤解を恐れずにいえば、ナポレオンの大陸封鎖のよそおいをかえた復活であった。ところが、小林昇教授の開拓的な諸業績によれば、⁽²⁾のちの「農地制度」論ではその政策構想はもはや棄て去られているのであり、そこでは新たな別個の構想があらわれているという。すなわち、彼は大陸諸国の経済同盟が当時仏露協商の可能性が現実化することによってきわめて望み薄いものとなったとみるとともに、また両国の経済制度の特徴からみて必然的に侵略的行動にでるであろうと判断して、それを防ぐためにはイギリスと手を結ぶ以外には可能ではないと考えたのである。リストは英独同盟がイギリスにとっても必要であるとみた。それは一つには、ヨーロッパ大陸からするフランスの英本土攻撃をドイツが牽制することであり、二つには、仏露両国がイギリスの確保しようとする対インド連絡路へ進出することを、ヨーロッパトルコへのドイツの膨脹によって挫折せしめ、こうして地中海を抱くイギリス中央帝国の建設を可能にすることであった。ところで、「イギリスが仏露両国との戦いに際して必要とするものは、ドイツの君主および政府の力と好意ばかりでなく、すぐれてドイツ国民の力と同情と」⁽³⁾であって、そのためにドイツに対しては、いわば国民的生産力の基礎でもある「自由な制度と完全な国民組織と」⁽⁴⁾が許容されなければならない。したがって、イギリスの経済勢力のドイツへの侵入は、阻止されなければならない。こうしたドイツの保護政策は、ドイツの政治的自立の基礎である経済的統一を達成するために、ひいてはドイツが真に勢力均衡の要石となり得るために絶対に必要なものであるばかりか、その意味では「究極においてイギリス自身にも大きい利益をもたらすものである」⁽⁵⁾と考えられた。その場合、ドイツのバルカン浸出には帝国主義的侵略の危険性がないであろうか。リストによれば、そうした侵略の危険性は、ドイツに独自の経済構造の確立によって阻

止され得べきものであり、それこそは「農地制度」の改革に俟つべきものであった。⁽⁶⁾ リストの「農地制度」論は、當時西・南ドイツにおいて「散在耕圖 Gütergemeine-verfassung」と部落制度 Dorferfassungとの生んだ娘⁽⁷⁾である零細経営 *Zergwirtschaft* が蔓延しており、それが工業力の発達にとって最大の障害になっているという事実認識にもとづいて、新たに上からの指導による広汎な土地整理でエンクローズされた中・小規模の独立自営農民層を多数つくりだそうとしたものであった。⁽⁸⁾ この構想は、一面ではたしかに零細所有の経営が基本的にはフランスジャコバン主義の基礎であり、新しい専制主義（＝ボナパルティズム）の導入される地盤となつてゐるという彼特有の觀察にもとづくフランスのそうした侵略的性格の発生を未然に防止しようという考慮と、イギリスの資本主義的大農場制度のもとに生ずるプロレタリアートの大群の発生阻止への顧慮とによつて規定されてゐたが、彼の「農地制度」論を貫く基本的な視角は、ドイツ資本主義の後進性を基底において制約する土地制度の前近代的諸形態を清掃して、近代的な色調の濃い独立自営農民層を広汎に創出することにより、ドイツ資本主義の發展に前望的な基礎的諸条件を与えようとするにおかれていたといわなければならない。⁽¹¹⁾ そこには政策構想の變化にともなつて、かの發展段階説はその姿をひそめ、代つてドイツに独自の国民經濟の構造という「型の問題」が前面に押しだされてゐる。⁽¹²⁾ だが、そうした構想の變化にもかかわらず、リストの「ドイツにおける保護制度の必要と國民的生産力の向上」という主張は、貫徹しているのである。⁽¹³⁾ 「農地制度」論が、ほぼ以上のような構想にもとづいていたとすれば、それは、まさしく「シェーワ―ベンのデモクラート」(レンツ)として登場した初期の時代にすでに育まれていたドイツの土地制度に対する見解の復活といえないだろうか。⁽¹⁴⁾ リストは「國民的体系」において勃興するドイツ産業資本のイデオログとして活躍したと同時に、「農地制度」論を書くことにより、その点では再び初期のリスト、すなわち、のちにみるように小ブ

ルジョアの立場に戻ったのであろうか。もし両者の間に相違があるとすれば、それは一体どういう点においてであらうか。また、初期のリストの見解はどういう点で後期のそれに対して、原型たりうるか。さしあたって、そういったことがらが「農地制度」論を検討する場合に問題となるであろう。されば、ここではごく大づかみながら、初期リストにおける土地制度論の論旨を紹介しつつ、当面の問題に接近することとしたい。

〔注〕

(1) 小林昇教授は、この点をとくに強調しておられる。同氏著「フリードリッヒ・リストの生産力論」(東洋経済新報社)序章『国民的体系』とリストの全体系」を参照。また、同じく同氏著「経済学史研究序説」二二三頁、二四〇—二四一頁、その他諸箇所を参照せよ。

(2) 小林昇「フリードリッヒ・リストの生産力論」、『フリードリッヒ・リスト研究』(日本評論社)、「経済学史研究序説——スミスとリスト」等。

(3) Friedrich List, Werke, VII, S. 281.

(4) Ders., a. a. O., S. 281.

(5) Ders., a. a. O., S. 281.

(6) アルトゥール・ゾムマーのいわゆる「準帝国」Quasi-Imperium (A. Sommer, Fr. Lists System der politischen Ökonomie, S. 217.) たるこの構想において、リストがさしあたって望んだのはドイツ人のハンガリー移住であり、しかもその場合にも彼はハンガリーのゲルマン化でなく、ドイツ人移住のマジャール化を勧告しているのである。これらの移民はリストのいわゆる農場制度の創設によって新たに生みだされた人々であり、この植民が成功することは、ドイツの国民的生産力を根柢から近代化するはずの農場制度の実現を有効に確保するために必要であるとともに、これによってドイツはその再生産圏を「準帝国」の規模にまで拡大し、イギリス・フランスに対する「第三の型」の国民経済を確立することになる。Fr. List, Werke, V, SS. 502—524. 邦訳「一四九—一八三頁参照。なお、小林昇「フリードリッヒ・リストの生産力論」一九八一—一九九頁の指摘を参着。

(7) Fr. List, Werke, V. S. 435. 邦訳、四一頁。

(8) 彼の意図した中・小規模の農場(四〇—六〇モルゲン)が、独立自営農民(Ⅱ分割地農民 Parzellenbauer)層のそれに比定できるか否かの点は、なお後段においてたちいて検討されるはずであるが、さしあたっては、小林昇「フリードリッヒ・リスト研究」所収の「リスト『農地制度』の分析」を参照せよ。

(9) Fr. List, Werke, V. S. 421f. 邦訳、二四頁以下。

(10) Ders., a. a. O., S. 430 Anm. 邦訳、三四頁以下。

(11) この点は、さらにたちいて論じられるべき論点であり、ここでは単に指摘するだけにとどめる。

(12) 小林昇「経済学史研究序説」二五一頁。ただし、リストの歴史認識のうちに発展段階論的な見地がまったく消失してしまったというのでは、もとよりない。「農地制度」論の背後に、歴史認識の方法としてそうした見地が存していたことは、明らかである(とくにその冒頭の数頁における叙述を参照)。ここでは、リストの政策構想を正当化するための合理的図式としては、棄てられたということを行っているのである。

(13) さらにいうならば、そうした主張の背後にあって最後まで堅持されたドイツ資本主義分析の視角こそは、「生産諸力の調和と均衡」の思想であった。この視角の意義については後述。

(14) 初期リストの土地制度論については、松田智雄「ドイツ産業資本の形成と保護主義経済理論」(上)、(「潮流講座経済学全集」所収、なお、これは同氏編「近代社会の形成」、要書房刊、に「土地所有と産業資本」と改題して収められている)を参照。

一 初期リストの土地制度論——「あらゆる工業の礎柱としての農業」——

初期リストの経済理論的な業績の最初のが、故郷ヴュルテンベルクを対象とした「農地の無制限分割への反対論」Wider die unbegrenzte Teilung der Bauengüter, 1816. という農業論であったことは、彼の思想体系の全貌を理解する上にまことに象徴的である。すでに工業力重視の立場にあったリストの眼に映ったヴュルテンベルクの土地制度は、当時どのような状況にあったろうか。⁽¹⁾ 何人の眼にも明らかことは、農民たちにおける驚くべきほどの零

細な土地保有 Grundbesitz 經營と、土地に対するいいようのない執着心である。農地の零細化についてリストは、こう語っている。「六〇モルゲンの畑を有する父の美しい農地は、その子供たちの間では一五モルゲンの地片 parzelle に分割され、孫の代になると、三―四モルゲンの零細地に分割されてしまう。祖父は四頭の美しい馬を用いて耕作した上に、家畜と生活資料とを豊富に有し、下僕や傭人には豊かに食物を与え、国家には租税を払ったが、孫は自ら畑を掘り返し、来る年来る年飢餓と窮迫と戦っている。」⁽²⁾彼らの提供する年貢は、「その生産物の剰余部分ではなくて、まさしく生活必需品をきりつめた部分なのである。」⁽³⁾この「小農民」Kleinbauer 層は、リストによれば、「もちろん耕地をたがやす点では大農場所有者よりもさらに精を出して働くのだが、しかし彼らが自らのさやかな相続地においてせつせと働くのは、そこでとれた收穫物をもっぱら自分だけで消費するためであるにすぎない。」⁽⁴⁾すなわち、「小農民」層は自給自足的な自然經濟の枠のなかで生活を営んでおり、五―六人の家族で三―四モルゲンの耕地を家畜もなしに手耕役をしている、せいぜい瘦せた役畜を使用しているにすぎない。その年貢はいわゆる必要生産物にまで喰いこむくらいに過重であり、彼らがいかに封建的諸負担の下に呻吟しているかを物語っている。⁽⁵⁾ところで、こうした「小農民」層とならんで、当時ある地方ではきわめて富裕な農民層の存在していたことを、リストは指摘している。それは「大農民」Grossbauer 層とよばれているが、彼らは大体六〇モルゲンの農地 Acker を有し、自分たちの家族と六人の下僕 Diensthofen したがってほぼ一〇人くらいの人々で畑を耕やしている。「そこでは四頭の馬を用いて美しい容器で堆肥を畑に運び、その厩は美しい家畜で満ちみちており、彼および日傭人、下僕 Gesinde は一年中食物を十分に有している。租税は支払わなければならないので、收穫物を荷車にいっぱい積みこんで市場に持って行って売りさばき、たとえ不作の年がきても農民は家族と下僕とに次期の收穫を待てば十分に回復する程度の

生産物をばつねに保有しているのである。農民が死ねば、長男が適度の課税で農地 Hof を相続し、その他の子供たちは豊富な婚資 Aussteuer を得る。そのうちに一人は村に居残つて別の農家のものと結婚するか、日傭人として良い収入を得、他の子供たちは都市に赴いて手工業を修め、農地を相続した者よりも幸福になるものも決して稀ではない⁽⁶⁾という。当時アルトヴュルテンベルク Altwürttemberg⁽⁷⁾ ロッテナッカー Rottenacker⁽⁸⁾ オーバーアムト Oberamt⁽⁹⁾ エーインゲン Eningen 地方では、この両者がともに存在していた。リストの叙述からわれわれは、この「大農民」層がすでに市場向け生産に入りつつあり、租税が金納化されていること、などを知ることができる。しかも、長男相続で他の子供たちは日傭人か都市の手工業者になり、その生活程度は良好というのであるから、この「大農民」層の優越している地方では、すでに「農民層分解」の胎動をすら感じとることができよう。ところで、零細経営による「小農民層」の支配的な地域では、どうであつたか。そこでは、はじめに引用したリストの指摘にみられるように、六〇モルゲンを有する「大農民」が存在していても、または成立し得ても、ただちに三―四モルゲンの零細経営に分解してしまい、「八〇―九〇人にのぼる一五家族が耕作に従事するまでに至る⁽⁹⁾」のである。そうした地域では「ただ困窮のみが彼をして父の家や故郷を放棄するように強制する⁽¹⁰⁾」次三男は当然に日傭人か手工業者になるべきはずであるが、そうした職業は彼らにとつていたずらに苦痛を増すにすぎず、その苦痛をひたすら農地に分割することによって、すなわち彼らも零細とはいえ土地保有者となることによってそうした運命を避けようと努めるのである。かくて「結局富裕な農民はもはや一人も見当らない⁽¹¹⁾」という惨状を呈するようになる。こうした地域では、たとえ日傭人層が発生しても就業のチャンスが近辺に豊富に存在せず、換言すれば局地内分業の未発展によって彼らは結局土地所有者にならざるを得ず、この点でも「農民層分解」への展望を未然に阻止してしまうことになる。否、そ

れどころか、こうした地域ではそもそも「大農民」層の成立自体が、きわめて困難なのである。というのは、リストによれば、まず誰の眼にも明らかな農地の分割相続という慣習が、不斷に無制限分割零細化への傾向を生ぜしめるからである。⁽¹²⁾それは必然的に経営の零細化を招来する。かくては生産力の向上はとうてい望み得ないばかりか、農業における剰余生産物の欠如は工業生産を圧迫し、「工業生産物の犠牲において」零細土地保有の経営が蔓延することを意味し、国内市場の形成を希求するリストの看過し得ない問題となっていた。⁽¹³⁾ところで、つぎにそうした零細化の傾向は、たしかに分割相続の慣習によって決定的に促進されはするが、実は一層奥深いところから発生していることを、リストに指摘する。彼はそれについて若干の例示を与えているが、それは、こうである。たとえば「農民の四人の子供たちや葡萄摘み人 *Winer* の六人の子供たちは、他日父の財産である土地から小地片を得て生活しようと望んでいるので、彼らは農民と葡萄摘み人になろうとする以外には、何ごとも考えていないのである」⁽¹⁴⁾「彼にとって最も身近かな考えといえば、何であれ、たださやかな土地を得て、その上に腰をすえることなのである」⁽¹⁵⁾「せっかく熟練した手工業者となって戻ってきてても、もしこうした地域で営業すれば、「やがては彼に若干の土地が〔遺産として〕帰属し、彼は自分の家の需要を充足させるために鋤をもつて野良にでかけ、この生活が気に入るようになる。数年後には織機台や鉤かけ台は空のまま棄ておかれ、熟練した手工業者から一人の小さいお百姓さん *Bauerlein* が生誕することになる」⁽¹⁶⁾すなわち、リストはこうした農民たちの土地への執着、「父のやったことをまたやるのは全く似つかわしいことであり、人が生れてきた場所に留まることは快よいものだ」⁽¹⁷⁾という、ウェーバーのいわゆる「伝統主義の精神」の裡に土地分割の究極の原因を見出しているのである。⁽¹⁸⁾彼の觀察することろでは、農民の土地所有への指向性は、ほとんど「自然の性向」とよぶべきほどにまで達しており、これこそは「何故工業生産がヴェルテンベルクで

繁栄しないのか、またどうして工業が大部分の地域で伸張しないのかということの理由なのである。」⁽¹⁹⁾

以上リストの論旨の紹介とそれに対する若干の解説をつけ加えて述べたのであるが、初期リストの土地制度論においては、(一)農業問題がなによりも工業生産力の増大への展望において把えられていること、(二)その場合零細土地保有の経営が農業生産力の向上を遅滞せしめていること、(三)それは農民の分割相続慣習に媒介されつつも究極的には彼らの土地所有欲⁽²⁰⁾に伝統主義の精神にもとづいていること、などをほぼ明らかにし得たことと思う。それならば、この事態はどのように解決されるべきであるか。リストはそこで問題を、(一)土地の自由な交換と、(二)「小農民」層の根絶と⁽²¹⁾いうことにしほす。そして、その方策はつぎのようなかたちで提唱された。「国家はまず以てどれくらいの広さの畑が適正な農業のために必要であるかを決定しなければならない。すなわち、二〇、三〇、四〇モルゲン等々に。それについて *Lehensverband* の解散がおこなわれる場合にも、農地の広さがこのモルゲン数よりは縮少することのないように規定が設けられなければならない。ただしその際、土地の所有者は散在した数モルゲンが再び総画 *surrogieren* される場合以外は、一切の部分の譲渡にはならないのである。」⁽²²⁾ここには後年の「農地制度」論の原型が打ちだされているかに見える。リストの農地改革のプランは、このように、(一)土地の再分配、(二)経営規模の適正化(「大農経営」)の二点から構想されており、それは優良な日傭人層と手工業者層をその内部から分出せしめ、ひいては「国民的」工業と国内市場の形成を押し進め得るような、その意味で「あらゆる工業の礎柱としての農業」を確立しようとするものであった。ただし、その場合にも創出されるべき「大農民」層は適正規模を持続するものとされており、その農場に雇傭されるはずの日傭人層の問題を蔵しつつも、なおもつばら論点が伝統主義からの解放(「農民解放」)におかれていること、および「工業生産にたずさわる人間はどこからくるか」の問題に対して独立の手工業者を

提供することと解決しようとしている点において、初期リストの小ブルジョア的立場は、きわめて明瞭であるといえよう。⁽²³⁾ 後年の「農地制度」論においては、初期におけるこういった問題把握の仕方が一層深められつつ、しかも相違をも示しながら展開せられており、つぎにその点をややたちいて考察するとともに、「ドイツ資本主義と土地制度」に対するリストの独自の問題理解の仕方について検討を加えてみることにしよう。

〔注〕

(1) リストが初期においてはすでに工業力育成の視角から土地制度の問題を扱っていたことについては、以下論旨の紹介において明らかにされるが、さしあたってここでの問題は、にもかかわらず、リストの理論的視座 Aspect の内部においては、農業が「あらゆる工業の礎柱」(Werke, I, S. 654.)たる位置を与えられている点の解明にある。もとより、その点の一層の分析は、彼の工業力論をも含めて包括的な観点のもとにおこなわれなければならないが、本稿ではもっぱら土地制度の面においてその検討がなされているにすぎない。したがって、この問題の全面的検討は、彼の「工業制度」論を分析してのちに、あらためて統一的におこなわれることになろう。

(2) Fr. List, Werke, I, S. 580.

(3) Ders., a. a. O., S. 580.

(4) Ders., a. a. O., S. 581. なお、初期リストのこの論文では、後年の侏儒経済(=零細経営)Zergerwirtschaft という用語はなく、もっぱら「小農民」Kleinbauer が使用されている。しかし、三―四モルゲンの土地保有=経営主とされているところからも、両者がほぼ同一のカテゴリーに属するものであることは、明らかである。

(5) リストは、ここで明瞭に彼らの年貢がその必要生産物部分まで喰いこんでいること、したがって、その年貢収取がなんらかの意味で「経済外強制」によって支えられていることを認識している。後年リストは、その点を一層根本的に部落制(=共同体)の存続から説明しようとしている。それについては、なお後述。

(6) Fr. List, Werke, I, SS. 581―582.

(7) Ders., a. a. O., S. 582.

(8) 引用文からも明らかなように、その地方では日傭人層が発生し、しかも就業のチャンスにめぐまれて生活は一般に良好であるばかりか、ときに農民のそれを上廻ることがあるというのであるから、共同体規制はいうまでもなく弛緩しており、場合によっては農民相互間における不均等発展の現実的可能性が存在していたことを示唆している。リストが事実認識としては、こうした「分解」の可能性を知っていたということは、重要な点である。後年においても、その点は同様であった。Vgl. Werke, V. S. 490. 邦訳、一二九—一三〇頁参照。

(9) Fr. List, Werke, I, S. 581.

(10) Ders., a. a. O., S. 581.

(11) Ders., a. a. O., S. 581.

(12) この理解の仕方は、後年の「農地制度」論においてもうけつがれている。Vgl. Werke, V. S. 445. 邦訳、五九頁参照。ただし、その評価については、ある相違があるが。

(13) 初期リストの国内市場形成Ⅱ構造論については、本稿の課題を遙かに超える問題であり、ここでは論じ得ない。そのためには、まず彼の「工業制度」論および「商業」論が前提されねばならないからである。それについては、なお前掲松田教授の論文を参照せよ。

(14) Fr. List, Werke, I, S. 581.

(15) Ders., a. a. O., S. 581.

(16) Ders., a. a. O., S. 581.

(17) Ders., a. a. O., S. 583.

(18) ここでウェーバーの用語を持ちだすことについては、あるいはやや唐突の感があるかも知れない。しかし、ウェーバーの「伝統主義の精神」が実は共同体に密着して発生するものとして把まれていた事態に想到するとき、あながち奇矯の言でもないであろう。それについては、拙稿「職業観念とその経済的基盤」(大塚久雄編「資本主義の成立」所収、河出書房)参照。

(19) Fr. List, Werke, I, S. 581. リストが土地細分を惹起する究極的要因として、小農民におけるこの「土地所有への自然の性向」をあげていることは、彼における経営の重視(Ⅱ生産力の視点)と相俟って、興味深いものがある。というのは、小農民層の土地所有欲(Ⅱ自然の性向)は、伝統主義によって裏打ちされることにより、当面なよりも封建的性格を示すものと

して理解されていることを、間接的に物語っているからである。

(20) 本稿で使用する「II」の符号は、この両端が等しいという意味でなく、両者の間に内面的関連があるという意味でつけられている。この場合もそうである。欲望はそれ自体としては、いかなる意味でも精神たり得ない。

(21) Fr. List, Weke, I, S. 584.

(22) Ders., a. a. O., S. 584. なお引用文中の *Lehensverband* は、きわめて封建的なものであり、当時ヴュルテンベルクの土地制度の全体に重圧を加えていた。それについては、モーゼルのつぎの書を参照せよ。Rudolph Moser, *Die bäuerlichen Lasten der Württemberger, insbesondere die Grundgefalle*, 1832, SS. 295—298. 松田教授の御教示によれば、ヴュルテンベルクがこうした封建制から解放されるのは、ずっと後代の一八六八年以降ということである。

(23) 後期のリスト(アメリカから帰国してのちの)は、その点で明らかにその立脚地を小ブルジョアブルジョア的立場においており、工業制度に対する認識も深まっている。したがって、ファビウンケかマルクスを引用しつつ、三月前期のリストを「大ブルジョアのイデオログ」と規定していることは、その限りでは必ずして誤ってはいない。小林昇「東独のリスト」(『経済学史研究序説』所収)三二六頁参照。ただし、その観点からのみでは、リストの「農地制度」論の理解が不十分になることは、小林教授の指摘されるがごとくである。前掲書、三三四—三三五頁。

二 後期リストの「農地制度」論——中産的農民の理念像

リスト自身の書きしるすところによれば、彼が「農地制度」論を公刊するに至った事情は、こうである。⁽¹⁾すなわち、彼の思想体系は 一、農地制度と農地政策。二、工業制度と工業政策。三、交通制度と交通政策。四、財政制度。五、司法制度と行政制度。六、国防制度。七、国家制度と議会制度。八、国民の精神とそれが生産諸力および富の獲得に与える影響。九、国際関係と対外政策。以上の九巻から成りたっており、もし彼が単なる学者であれば恐らくこの順序に書いたであろうが、彼の実践的関心はその最後の巻(『政治経済学の国民的体系』を最初の巻たらしめた

のである。まことに「わたくしがこの変更を行ったのは、一つには、講壇のための体系を建設するよりも国民体 Nationalität を建設することのほうが、たとえそれが下働きの仕事にしかすぎなくとも、一層重要かつ名譽な仕事であると考えたからであつた。」⁽²⁾その巻では、したがって、農地制度と土地整理、国外移住と植民などについて、ただ新しい思想をもっているということのみが語られたにすぎず、すべては続巻にゆだねられていたのである。だが、その計画は健康上の理由もつたつて、なかなかリストをして執筆せしめるまでに至らなかつたのであるが、その後彼は次巻にドイツと諸外国との貿易關係、植民地貿易、ハンザ諸都市を關稅同盟に合併せしめる方策などを収める案をたて、「第一巻の公刊以來わたくしに向つて下されたいいろいろな批判を根本的に吟味することに心を決めた。」⁽³⁾ところが、リストは「この諸批判に目を通しながら、最初に少くとも農地制度に關するわたくしの体系の根本思想 Grund-ideen を知らしめることがどうしても必要であることを知つたのであつた」⁽³⁾（傍点引用者）。こうして「農地制度」論は、リストの体系の根本思想を論敵に知らしめる必要にもとづいて執筆、公刊されたのであるが、そうした主觀的動機とともに、他面彼自身の政策構想も、「國民的体系」の刊行後においてこの「農地制度」論の執筆に至るまでに根本的な變化を闊していたことについては、本章のはじめに述べておいたとおりである。⁽⁵⁾それはともかく、リスト自ら自己の体系の根本思想を述べたものであると明言している点からも、『農地制度』は、リストの全經濟學體系の基礎におかれるべき論說であり、これに対する慎重な分析を欠いたリストの研究は、すくなくとも今日の研究段階では、積極的意義をもちえない⁽⁶⁾という評價は、正當な立言であるといひ得よう。

ところで、「國民的体系」の観点からみると、工業力の發展こそは農業の近代化をもたらすはずのものであつた。この工業力の發展が何らかの理由で阻害され、きわめて不振な狀態に陥つた場合に農業の蒙る影響は、どのようであ

るか。リストは南ドイツの農業事情を念頭におきつつ、つぎのように述べている。「こうした国の農業はどうしても發育不全になるにちがいない。なぜなら、大規模な国内工業がおこる場合には諸事業に就業を見いだし、農産物に対する大需要をよびおこし、その結果概して農業をきわめて有利ならしめまたそれを助長するところの増加人口は、この場合はまだ農業へだけ赴むき、国民の力と文明と富にとつて最も有害な土地の分割と小農経営とを生むからである。大部分が小農からなる農業国民は、大量の農産物を国内商業に投ずることもできず、また工業製品に對するいちじるしい需要を惹きおこすこともできない。ここでは各人はその大部分が、自らの生産と消費とに局限されているのである。」⁽⁷⁾そして、この「發育不全の農業」*verkrüppelte Agrikultur*を工業力の發達によつて打破しようというのが「国民的体系」の立場であり、こうした問題視角が前述の初期リストの土地制度論のうちにもある程度うかがわれることは前節で指摘したごとくであるが、この看点は一層深められつつ、「農地制度」論にうけつがれ、「あらゆる工業の礎柱としての農業」の側面から見直されているのである。⁽⁸⁾その点は、なお若干たちいった検討を必要とするかに思えるので、つぎにリストの基本的な論旨を紹介しつつ説明を加えていくことにしたい。

リストは「農地制度」論の冒頭数頁にわたつて、その問題をあつかうにあたつては、どのような歴史認識にもとづいてなされなければならないかについて論じている。それによれば、ユストウス・メーザーのいわゆる国家株式 *Staatsaktie*（＝土地所有）は、「土地所有の分割状態と耕作者の多数の物質的・精神的・政治的生活状態——すなわち国民が自由であり強力でありまた良く統治されているか否か、その存在と将来とがしつかりした基礎の上に立っているか否か——によつていちじるしくその運命を左右される」⁽⁹⁾ものであり、どのような大国民においてもつねに、事物の本性にもとづいて、最も多数の国家株式は、国家の利益への根源的參與者である土地所有者の手に歸するであろう

から、土地制度がどのような形態をとっているかの問題は、単なる農業経済的、財政的等々の領域を超えて遙かに重要なこととなる。しかもその場合、問題は単に農業に限られずに広く全国家と国民一般の福祉につながるものであり、いかなる種類の土地所有が最大の総収益と純収益とをあげるかという点については、交換価値理論によって容易に決定し得るかもしれないが、それだけでは、「いかなる種類の所有が最も有能かつ最も健全な市民を、また最も良くかつ最も永続する国家を、さらに最も強く最も立派な国民を生むか、ということとは少しも明らかにされない」⁽¹⁰⁾のである。ところで、リストによれば、国家制度に関する見解こそさまざまに分れるにしても、努力すべき最高の目的が国民の名誉と權威と自由にあるという点では一致しており、それは立法・行政・司法の諸分野に人民が広汎に参与することによって、またそれは「国家市民 Staatsbürger と地方自治体 Korporation との利益が代表せられかつそれらが自立するという道によってのみ行われる」⁽¹¹⁾のであって、この人民代表の制度は結局市民層が経済的・精神的独立を有している場合にのみ有効に機能し得るものであった。しかも、「精神的独立は主として経済的独立から生れるもの」であり、その点で市民の経済的独立を支えるものこそ、かの近代的な工業制度とこれからとりあげるはずの農地制度であつたのである。では何故リストは最初に農地制度の問題をとりあげたのであろうか。彼の見解によれば、「われわれはまだ古いギルド制度から新しい状態への過渡期にある。機械と発明とはまだ旧式な工業状態を破壊しつつある途中である」⁽¹²⁾（傍点引用者）。そして、こうした時期にはどういう工業制度がドイツに望ましいか、またどういう方向に進行しつつあるのか、今から予想することは不可能であり、今日語られることは「未来の新しい制度の予感ではあつても、現在ではまだ残念ながら、たいていは実行し得ぬもの」⁽¹³⁾なのである。

ところが、農地制度については事情が異なっていた。ここでは、事態はまことに切迫していたのである。すなわ

ち、青年時代に故郷ヴェルテンベルクにおいて、まざまざとその醸した弊害をみせつけられたあの零細経営（侏儒経済 *Zergwirtschaft*）が蔓延して、農地制度の最大の欠陥になっていたからだ。「この場合、農民は体に元氣をつける食物をとることができぬばかりか、それがなくては獣でさえ体が悪くなるという一番大初な薬味、すなわち塩にさえ欠乏し、自分で紡み自分で織ったばろぎれを身にまとい、驢馬や馬や牽き牛を使いはするもののこれらの役畜に栄養のある飼料をやることができない。しかもそれにもかかわらず、労働者階級の大部分は、その窮乏した経済を営むには誰にでも時間があり余るために、古いしきたりのままでぶらぶら日を暮らして行くのである。……もつとも、この害悪がすでにドイツにおいてはアイルランドのように深い程度にまで至っていると主張することはできない。しかしライン・ネッカー・マインの河岸においては、また零細経営が支配的となつて土地の分割が放任されているところではどこにおいても、これと同様な害悪がすでに戸口にまで来ていることを何びとが否定できよう。とどこころでは、それはもう現実となつているといえる¹⁴⁾」のである。

こうした零細経営と土地細分は、隣国フランスの場合には「無際限な専制主義の自然的基礎」をなしており、それはジャコバン主義が自由を欲し、そのために土地の細分を手段として、新原則と新状態との支持者を獲得し、かつ貴族を絶滅しようとの意図の結果なのである。何故なら、際限のない土地細分は、おのずからなる帰結として眞の自由と万民の福祉とを破壊する単、純、な、平、等、のみをもたらし、万民はかくて欠乏に悩み、経済力に支えられた精神的独立は影が薄くなり、国家市民の地位を主張しかつその義務を果し得るような代表制度は、その外観を残すだけとなり、専制主義が尨大な官人群を擁しつつ、多数の無力かつ無権利の大衆を統治することになる（フランス・ボナパルティズム¹⁵⁾）。だが、リストはこのように西・南ドイツの零細土地保有經營をフランスの分割地所有經營に対比せしめ

ではいるが、もとより両者の間にはかなり明確な構造上の差異のあることを、いい得べくば段階的、相違を認めていたのである。⁽¹⁶⁾すなわち、フランスの場合こうした農地制度の欠陥は「工業によっていちじるしく緩和されて」おり、「工業人口はその数に応じた量の農産物を需要することによって、土地細分という毒に対する解毒剤の役割を果している」⁽¹⁷⁾からである。リストの引用しているエディンバラ・リヴェウの一八二四年七月号が正当に指摘しているように、「フランスの農民の状況が大革命以来いちじるしく改善せられたのは、たしかに土地細分の結果ではない。むしろ土地細分にもかかわらず改善せられたのである。この急激な発達、封建的諸関係が廃止され生産諸力を圧迫していた爾余の諸負担が撤廃された結果おのずから生じたものであり」⁽²⁸⁾（傍点引用者）、土地細分はその場合却ってフランス革命の効果を弱める方向に作用したのであった。ところが、ドイツにおいては、事情が異なっていた。この両者の間の差異を説明するためには、ここで少しくリストの説明原理に触れておかなければならない。

リストが農地制度を分析し、かつ説明する基本的視角は、彼独自の分業理論におかれている。すなわち、「いかなる文化を持つ国民にあっても、高い程度の個人的社会的福祉は、ただその国民が生産諸力を調和的に発達させる場合、つまり農・工・商業が正しい均合いを保って発展する場合にのみ存在する」⁽¹⁹⁾のであり、それはまた、その国民が国民的分業を最も完全な方法で実現した場合である。そうした国では土地細分は容易に生じない。何故なら、工業人口の必要とする原料と食料とは必ず農業人口の剰余生産物を購入することに依存しており、また農業人口はその剰余生産物の販売により必要な工業製品を買い得るのであるが、その場合この農業部門に生じる剰余生産物は農村以外で消費されるため、農村人口の自然増加部分は農村の与えられた消費需要をはみでることによって、結局工業部門に流入せざるを得なくなる。かくて、工業人口は増加し原料と食料に対する新需要が発生し、それに応じて農業では剰余生

産物の市場が開けることによる生産物量の増大が惹き起されて、農村人口自身の増加も生じてくる。この場合には、それは明らかに農業生産力の向上にもとづくのであって、土地細分の結果ではない。こうしたところでは当然に労働の機会と報酬とが多いために、資産をあまり持たぬ者は土地に執着して零細農になるよりはむしろ日傭人になることを選り、零細経営よりは中経営が発達する。そこで生ずる国外移住も零細土地保有に経営の蔓延している地域におけるそれとは、まったく事情を異にするものである。フランスにみられる土地細分は、むしろ分業構造のこの類型に包摂される性格のものであった。したがって、その土地細分という現象が生ずる理由は、別の歴史的諸事情にもとづいていたとみななければならない。何らかの理由で、たとえば戦争とか有害な制度とか外国の競争などのために国内の工業が農業と同程度に発達しない、つまり不均衡な分業構造をとった場合には、まず前述のそれとは異なって農産物に対する都市の需要はごく僅かとなり、工業製品に対する農民の消費能力はきわめて小さくなる。そうすると、農産物は農村内部で消費されなければならなくなり、かくて農村内部の自然増加人口は都市に流出せずに農村にとどまり、そこで生活せざるを得なくなる。こうして、リストは後者のような分業構造の社会で西・南ドイツにみられるような土地細分が生ずるというのであるが、もとよりそれは土地細分を説明するための一般原理であり、だからおのずから土地細分が生ずるとは、まだいいえないであろう。リストは一応土地細分を前述のような、ちようどミスガ「国富論」第三篇で展開した市場形成の自然なコースとそうでない場合の二つの途の理論に比し得るような構想にたつ分業理論にもとづいて説明しようとするのではあるが、「農地制度」論においては問題は、一層具体化されてとりあげられている。というのは、土地細分化は前述の一般的要因に究極的にはもとづいているとはいえ、それを一層蔓延させるところの、いわば土地細分化の特殊決定要因 specificum が問題にされているからである。リストはそうし

た特殊決定要因をさぐりあてゐるにあたつて、まず「相続に際して土地を平等に分割する」均分相続の慣習を一つの要因として指摘する。だが、この分割相続が零細経営を発生せしめ、ひいては農業の近代化を遅滞させ、近代工業力の育成を阻止する究極の決定要因であるとは、たとえば十三世紀イングランドのイーストアングリアと比較してみても、とうてい云いえないことは明らかである。⁽²¹⁾ リストもまた、それが土地細分化を促進させる一つの要因であるにしても、「すべての相続者にいろいろな場所にあつていろいろな地味を持つ土地の小片を与えて以てあらゆる特徴を具えた零細経営の生れるのを容易に」⁽²²⁾ するのは、実は散在耕圃制、Gütergemeinerverfassung と結びついているためであることを指摘している。しかし、散在耕圃制がとられていても、必ずしも零細経営が発生し、農業の近代化が阻止されるとはいえないであらう。たとえば、一六世紀の後半から一七世紀にかけてイングランドの各地で盛んにおこなわれた散在耕圃の地条への牧草栽培（いわゆるレイ牧草地条）の事例は、そうしたレイ牧草地条が散在耕圃の真唯中にあるにもかかわらず、実は農民が自由にかつ個別的にこれを経営し生産力を向上せしめていく場合のあり得ることを示しているのである。⁽²³⁾ したがつて、散在耕圃制はたしかに土地細分化と零細経営の蔓延を促進する有力な要因ではあるが、なお特殊決定要因とはいえない。ところが、リストもそのことは充分に知っていたようであつて、彼がそこで究極の特殊決定要因としてもちだしてくるものこそ、いうところの村落共同体、Dorferfassung である。リストは往時人々が平野で生活を営む場合、当時の事情の下では個人の財産と安全の配慮こそ第一の必要事態であり、それは集住によつてのみ確保できたと考える。しかも「集住 Zusammenwohnen は必然的に散在耕圃 Gemeinde を生んだ」⁽²⁴⁾。リストはその理由として、「さまざまな事情にある個々の農民にそれぞれ適当な持分を、それが個々の主要な分地（条地）^{フルール}においてで、できるだけ平等になるような方法で与えることが合理的であり、正当であり、また当然であ

ると思われたこと⁽²⁵⁾」をあげている。まことに「どこにおいてもこの事情こそ、散在耕圃が開始される主な原因であった」し、「今日のような、農民の土地所有の権源はここにあるものと思われる。」⁽²⁶⁾はじめは村落の全所有地は共有財産と考えられていた。その後、散在耕圃制が村の財産を個々人に平等に分与することを通じて導入され、結局森や牧場や泥炭地といった荒れた湿地のみが共有地として残されるに至った。リストのみるころでは、「封建制度によって自由な土地所有者が隷属せしめられ、あるいは進んで隷属を求め、保護を得る目的から自分の土地に地代を払ってこれを小作地として与えられることになっても、この事情は変らなかつた。」⁽²⁷⁾というのは、領主にとっても彼に地代を支払うべき者を集住せしめてこれを保護することは必要であつたからである。すなわち、彼の地代収入はこれによって確保され、領主自身の闘争力と防衛力とはこれによって増大したからであり、われわれとしては、リストがここで村落共同体と封建領主制との相互依存⁽²⁸⁾相互規定の関係を鋭く指摘していることに注目しておきたい。それはともかく、以上の紹介でリストが散在耕圃制の基盤として措定した「集住的部落制度」*Dorferfassung*が、今日経済史家の慣用するところの、いわゆる「ゲルマン的共同体」であることは、ほぼ明らかになつたことと思われる。事実リストが西・南ドイツにおける零細土地保有⁽²⁹⁾經營蔓延の特殊決定要因を「集住的部落制度」に求めたとき、それは決して單純に現象的な、散在耕圃制とか非歴史的な村落制度一般を指しているのではなく、すぐれて *Lehensverband* の重圧下に呻吟する封建的な村落共同体を問題にしていたのであつた。⁽²⁹⁾われわれは、そうみることに決して不当でない所以を、つぎに少しくたちいって説明しよう。

〔注〕

- (1) Fr. List, Werke, V. S. 542. 邦訳「二二二頁。以下リスト「農地制度」の訳文は、若干の場合をのぞいて、あつぱらこ

の「邦訳」に拠ることとする。

- (2) Ders., a. a. O., S. 543. 邦訳、二二一頁。
- (3) Ders., a. a. O., S. 545. 邦訳、二二四頁。
- (4) Ders., a. a. O., S. 545. 邦訳、二二四頁。
- (5) なお、それについては、小林昇「経済学史研究序説」二一五—二二七頁の敘述を参照。教授はそこで、リストの政策構想を変えさせた理由に、(一)農業における自由貿易の主張が無意味となったこと、(二)フランスに対する認識の変化、(三)プロレタリアートへの警戒、をあげておられる。
- (6) 小林昇「経済学史研究序説」二二七頁。
- (7) Fr. List, Werke, VI, S. 58.
- (8) リストが「農地制度」論で問題にしていることから、ドイツの近代化が究極において土地制度によって制約されている事態の解明にむけられているのであるが、その場合「農地制度」論ではまさに近代化はそこから始められるべきだという意味で近代化の起点としての「農地制度」が、いわばドイツ資本主義分析の端緒に礎えおかれている。だが、そこへの論理の下降過程は近代工業力建設への阻止要因としての農業という観点から辿られているのであって、ドイツ資本主義分析の思想体系としてのリストの分析視角そのものは、一層深められてきているとはいえず、その意味では、初期以来一貫しているとみられよう。それについては、なお後述。
- (9) Fr. List, Werke, V, S. 418. 邦訳、一一頁。
- (10) Ders., a. a. O., S. 419. 邦訳、一一頁。
- (11) Ders., a. a. O., S. 424. 邦訳、二〇頁。
- (12) 本稿では「リストの「工業制度」論は論じ得なかったが、ここでリストが当時の工業の発展段階について、古いギルド制度 *die alte Zunft-verfassung* から新しい状態への過渡期 *Periode des Übergangs* として扱えている点は、注目に値する(「ニュフアクトチュア期」)。したがって、農業は、またその段階にも達していかないことになる。
- (13) Fr. List, Werke, V, S. 424. 邦訳、二二頁。リストは、それにいつて全集七巻に収められている *Die grosse Gewerbs-revolution*, 1843. 以下の諸論説に少しくたちらいつて論じている。

- (14) Fr. List, Werke, V. S. 443. 邦訳、五五―五六頁。
- (15) 小林教授も述べておられるように、リストがこの「専制主義」という表現のもとに、フランス・ボナパルティズムをみていたことは、まず理解するに充分である。邦訳、二七六―二七六頁参照。
- (16) この点は、つぎに述べることによってほぼ明らかになると思うが、その場合リストが「自然的体系」Le Systeme Naturel のなかで、零細経営の問題を経済発展の第一段階に位置づけて論じていたことを想起すべきであろう。「農業者と工業者の間における分業の欠如は、そこから土地所有の細分という最も有害なことがらが生ずる不利益を併せ有する。実際、増加する人口は工業に流出し得ないのであるから、自らの生計を土地の分割によって農業のうちに求めなければならないのである」(Werke, IV, Fr., S. 238)。この問題視角は、のちにみるように、「農地制度論」においても事態の一般的な説明原理として堅持されている。
- (17) Fr. List, Werke, V. S. 427. 邦訳、二五頁。
- (18) Ders., a. a. O., S. 429 Anm. 1. 邦訳、三二頁。
- (19) Ders., a. a. O., S. 444. 邦訳、五七頁。リストのこの「国民的分業」の看点は、のちにみるように、この「農地制度」論の性格をも決定している点で、重視されねばならない。
- (20) したがって、分業構造のこの類型では日傭人層の増大は必至であり、それは「農民層分解」に結実するのであるから、リストとしてもこの発展過程を事実認識としては容認していたことになる。また、この類型でフランスのように土地細分が生ずるのは、この類型「にも拘らず」なのであり、別個の観点から説明されなければならないであろう。フランスの場合は、リストも指摘しているように、ジャコバン主義的自由とナポレオン法典の均分相続法との申し子であった。
- (21) G. C. ホーマンズの研究によれば、一三世紀イングランドのイーストアングリア地方は、分割相続が慣習として行われており、土地保有は一般に零細であるが、にも拘らず農村人口の増大は東部の毛織物工業の勃興と結びついた事実を指摘している。そして、ミッドランドの一子相続の慣習が普遍的な地方では、却って共同体が強固に存続し、東部の農村工業繁栄とは逆に農業地域としての性格をのちのちまで保ちつづけていくというのである。ここでは、リストの論理とは「まさに逆」が真相であったのだ。なお、それについては、拙稿「ゲルマンの共同体の家族構造」(「村落共同体の構造分析」所収、時潮社)参照。

(22) Fr. List, Werke, V. S. 445. 邦訳、五九頁。

(23) 吉岡昭彦「地主制の形成」(創元社)一五二—一五四頁の興味深い敘述参照。なお、たちいった研究としては、椎名重明「イギリス農学史における十六世紀と十七世紀(市民革命まで)」(「農業経済研究」二八の一、二)および同氏「イギリス市民革命以前における農業問題——レイの普及と土地保有と入会権との分離を中心として——」(「社会経済史学」二二の五・六、二二の一)を参照。

(24) Fr. List, Werke, V. S. 464. 邦訳、八九頁。

(25) Ders., a. a. O. リストがここでおこなっている説明は、明らかにリストのいう散在耕圃制がゲヴァンネ制 *Gewannsystem* の上に立っていることを示している。ゲヴァンネ制が共同体の特殊封建的形態を現わす指標である点については、大塚久雄「共同体の基礎理論」(岩波書店)九九—一〇五頁の行論参照。

(26) Fr. List, Werke, V. S. 464. 邦訳、八九頁。

(27) Ders., a. a. O., S. 465. 邦訳、八九頁。

(28) リストのこの見解は、マルタ・ブロックの研究成果に一致す。Vgl., M. Broch, *The Rise of Dependent Cultivation and Seigniorial Institutions*, in J. H. Klapham and E. Power, ed., *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. I, p. 264.

(29) 初期において、すでにリストは農地制度の改革に *Lehensverband* からの解放を不可欠の条件であると考えていた。Werke, I. S. 584. なお、当時のヴェルテンベルクに関する農業事情については、R. Moser, *Die bäuerlichen Lasten der Württemberger*, SS. 20—90. モーゼルも同様に農地改革には、*Lehensverband* からの解放を必要とすると考えている。Vgl., Ders., a. a. O., S. 354f. モーゼルに拠ってみれば、リストが「零細土地保有」經營「範疇を構成する上に、よつてもつて認識のモデルにしていたヴェルテンベルクのそれは、決して封建制から解放されたフランスの分割地所有」經營の零細性と同一視されるべきものではなかったのである。ただし、西ドイツ一般を問題にしたときには、おのずから事情が異なってくることは、いふまでもない。Vgl., Werke, V. S. 533. 邦訳、一九六頁。

一九世紀初頭から中葉にかけて西・南ドイツに零細土地保有」經營を蔓延せしめた特殊決定要因である散在耕圃制

と分割相続制を伴う村落共同体 *Dorferfassung* の実態を、リストはどのように把握していたのであろうか。リストが散在耕圃制をゲルマン的共同体の一現象形態であるゲヴァンネ制としてみていたことは前述のごとくであったが、その当時においてもこの散在耕圃制による農民経営が、「たくさんの畑道・耕地の踏み荒し・共同耕作 *der gemeinschaftlichen Flurwirtschaft*・牧場の共同利用 *der gemeinschaftlichen Weidenutzung*・不生産的な畦・直接監視の不可能（したがってしばしば野荒しにやられる）・共同地 *Mark* に関する際限のない気ずかい・そうして最後に、あらゆる場合に行使される地役権 *Servitute*」⁽¹⁾（傍点引用者）などによって、いちじるしい制約をうけていたことを、リストは指摘している。実際農民たちは「自分の欲するものを栽培することができないし、自分の土地の性質を一層良い思いつきにしながら十分に利用することができないし、耕地にすればかならずはるかに多くの収穫が得られる土地を牧草地として利用したり、あるいはその逆のことをしたり」⁽²⁾しなくてはならなかった。したがって、当時散在耕圃制による経営に携わっていた農民たちは、まことに厳重な共同体規制の枠の中に閉ぢこめられていたといえるであろう。そして、リストは牢固として抜きがたい農民たちの伝統主義のうちに共同体規制を受けいれる素地のあることを看取している。そうした伝統主義を、リストはほぼ四つの面において把えているとみることができよう。(一)労働慣行。農民たちが日常の労働において、きわめて伝統主義的であることを、つぎのように画いている。「われわれは労働者が半時間も一時間も、あるいはもっと長い間、犁を引いたり、肥や収穫を積んだ車を曳いたり、頭の上に重荷を載せたりして、あちこち歩き廻るのを見る。そうして彼らの勤勉に満足して、事物の秩序を変えればこれらの過重な労働が一切節約されることに思い至らないのである。農民が肥料の山を雨に濡らしてその灰汁^{あけ}を流してしまうことをわれわれはけしからぬと思うが、もし農民の耕地が近くにあるならば肥料もすっかり違ったふう処理できるのだと

いうことには、少しも気がつかない。われわれは、部落のすぐまわりには樹木や、ホップと野菜の畑や、牧草地やゆたかな穀物畑があるが、これに反して遠い野ずらには木が一本もなく、すこしも良く耕されてはいず、みのりもごくわずかであることに気がついている。しかし、土地の所有者がその所有地の中央に住むならば村の全域が均等に見事な外観を呈し得ることに気がつかないのである」⁽³⁾と。ここでは、リストは觀察者側の態度について語っているが、それを通じての農民の労働の模様がまざまざと画きだされている。⁽⁴⁾生活様式。「習慣的な思考は、農民の個人的・社会的諸状態に關しては特につよい力をふるうものである。大多數の農民の、粗惡な、無趣味な、不恰好な、不合理にできている着物は、われわれの世界を知らぬ未開人に見せれば、立派な服裝をした都市の住民とその農民とをまるで別な動物だと思わしめるであろう。狭い、居心地の悪い、汚い家と、いつも変らぬ塩なしのジャガ芋と脂肪拔きの牛乳との料理を、われわれは最もはげしい労働をしなければならぬ者にとって大いにふさわしいものだと思つてゐる。しかし、われわれ自身はこれではたまらぬということを認めぬわけにはゆかない」⁽⁴⁾「ここでも農民生活に對する世人の側の伝統主義的な態度が語られているが、リストの論旨からいって、農民自身が伝統的な生活様式を固執している間の事情もまた、ほぼ明らかであるところである。⁽⁵⁾婚姻。教養のある官僚階級および市民階級と農工業者の階級、「この兩階級は今日では、二つの違った国民のように、無關係に、あるいは分れ分れに生活してゐて、そのありさまはまるでガンヂス河畔のバラモン族と賤民族との間柄のようである。だから、結婚によつて一つの階級から他の階級に移るといふようなことは、町や村の語り草となるくらいである。なるほどときどきは農民の息子が官吏や僧侶になるのを見かけることもあるし、また農民の娘が——もし彼女が富裕であつてしかも百姓の衣裳を町の衣裳と取替へたと思ふならば（これはよくあることだが）——商人や吏員や牧師や医者と結婚するのを見かけることもある。こ

う場合夫の方は、むしろこのような教養のある男がこんな仕方のない女と一緒になったことを惜しまれながらも、この不均合な結婚を見逃してもらうのがつねである。もともと『百姓女』Bauernfräulein に対して彼のお上品な女友達がひんしゆくすることは決してやまないのであるが。しかし、教養のある中産階級から出た娘が農民の階級に移るといふことはめつたにない。それは主に古くからの牧師や森林官の娘の場合にのみ起ることであるが、こういう娘は農民と交際して来た結果次第にこのように身を落す考えに慣れたものである。実際この結婚にはそんな性質がある。なぜなら彼女は、爾後はもとの階級からはまるで人でなしのように取扱われるし、また新規な、そうしてむしろどうしても粗野な女仲間が、彼女の昔の教養の残りをみな『百姓婦人』Herrn-Bäurin のお上品ぶりといって非難してよろこぶために、新しい社会からも除け者にされるからである。そして、教養のある市民階級の息子が本当の農民階級に移る場合にいたっては全くまれである」(5) (傍点引用者)。リストのこの敘述は、さまざまの問題を示唆してくれる。まず第一に、婚姻上の障害が市民階級の男のところに農民階級の娘が行く場合よりも市民階級の娘が農民階級の男のところに行く場合においてきわめて甚だしく発生することである。これは婚姻類型におけるヒュペルガミー Hüpérganie であり、その古典的国土はリストも引用しているようにインドのカスト制社会である。(6) そして、こうした婚姻障害が類型的に発生する社会は、ともかく家格制が厳存しており、いわゆる身分階層制の支配している社会である。(7) イツ社会の構造は、この側面からも間接的に照射され得よう。第二には、リストも強調しているように、農村社会の内部においても、こうした婚姻上の障害が生ずるのであって、その罪が市民階級の側にのみ存するのではないということである。この農村社会の封鎖性が共同体の抜きがたく強固な存在にもとづいていることは、これまでの敘述と比べあわせてみて、ほぼ察するに難くないところである。(8) そして、ヒュペルガミーの逆の場合、すなわち市民階級の女

と農民階級の男との婚姻が増大するのは、ともかく共同体が解体し、封建的な身分階層制が弛緩していることを表明するものであり、ヒュルペルガミーが優勢である事実は、当時のドイツ、とくに西・南ドイツの零細土地保有⁽⁹⁾経営の支配的な地域では、封建社会の崩壊がなおとどめ難く進行しているとはいい得ない事情にあったことを物語っている。⁽¹⁰⁾

(四)教育。「鈍重・無教養かつ怠惰な農民は、實際都市の人間とは別個の人間である。しかしこの農民に教養への刺戟と手段とを与えるならば、彼は都市の人間と同じように良く、精神的に達するであろう。……ところで、(中略)ようやく自力で考えはじめたり文字によって勉強することができたりするような年頃になって、この仕込みを使う余地がない状態に置かれたとすれば、いったい読み書きが何の役に立つのだろうか」⁽¹¹⁾(傍点引用者)。「部落の生活がその飲み屋や飯屋や、訴訟・総有地・地役権・牧場・村などについての紛争と一緒に与える教育の手段 *Bildungsmittel* は、いったい何といたらよいものであろうか。まさにこういう状態こそ、農民のこころの偏狭さと部落に満ちている煩瑣な精神との、唯一の主原因なのである」⁽¹²⁾。リストのみるところでは、農村における無教養・無智の存続はその文化的な環境に由来するものであり、文化的環境が変れば、農民の伝統主義も揚棄し得ると考えたのである。「事実北アメリカに移住したドイツの農民が、はじめこそアメリカでの一日仕事の半分もできないが、じきに土地生れの者に追いつくことを、人々は知っているのである」⁽¹³⁾。そして、最後に散在耕圃制およびその共同体規制を受容する農民の伝統主義とならんで、それに対する物的基礎の一つをなすものとして、村有地 *Gemeindegründe*、*Gemeindeeigentum*、*Gemeindegrundstück* (とくに牧場と森林) があげられている。これは「未開状態の最後の残存物」であり、「散在耕圃 *Gemenge* とならんで、部落における集住の自然な結果なのであった」⁽¹⁴⁾。

以上リストの觀察するところにしたがうならば、零細土地保有^{II}経営の蔓延している地域では、多くの場合なお共

団体はきわめて強固に根づいており、共同体規制は厳しく各個人の自由で、独立な経営様式の展開を阻止していたといふことができる⁽¹⁵⁾。しかも、農地制度のこうした構造に加えて、きわめて強大な保守勢力が、近代化への動向に圧力を増し加えていた。その第一は官僚層の強大な勢力である⁽¹⁶⁾。リストのみるころでは、ドイツにおける官僚層の強大さは、農地制度の現状と深く結びついていた。というのは、農村において散在耕圃制が支配的な国家では、都市は未発達で工業も小規模であり、独立の教養ある農民層もほとんどみあたらない。こうして、村々では有能な村長に事欠き、代表議員も農民出身がいけないことになる。こうして、「独立の市民の現われることが少なれば少いほど、隷属的な役人の数は多い。国有地とそこからあがる地租との管理は、大規模な国有地管理局や、税務官とその下僚や、貯蔵倉庫の管理人などが必要とする。森林の経営は森林局・森林局長・森林官・森林監視人・森林会計官を必要とし、またこれらとともに多数の建物・建築監督者・建築師などの維持を必要とする。このうえにさらに国家と村々の行政にたずさわる官吏の数を加えるならば、かかる国家におけるこれらの官吏の総数は、農業における完全な市民 *Vollbürger* の数のみならず、全国の完全な市民の数に比べて、はるかに大きいことが発見されるであらう⁽¹⁷⁾。」この膨大な官僚群の物的基礎の一つは、もともと領邦君主の特定財産であった国有地 *Staatsdomänen* であったが、それが社会におよぼす影響力は、国有地が私有財産になっている土地面積との割合では広きにすぎ、かつ散在耕圃制が多くて独立の教養ある農民層が少い場合ほど大きいことになる。こうして、リストにとっては、いまや国有地の分割も農地改革遂行上必要な問題としてその視野のなかに入ってくる。第二は、国有地の売却問題と関連するが、王室の社会的権力と威望である。リストによれば、それは曾ては国有地から生れるか、少くともそれと同時に成立してその増減とともに消長したために、人々は今日でも国有地を確保しなければならぬと考えている。だが、権力の基盤は今日す

すっかり変わってきているので、「国有地（王家の私有地のことをいっているのでは決していない）を王家の利益のために国家の所有に止めて置こうとする人々の、国政に関する賢明さは、實際大いに疑問とすべきものである。」⁽¹⁸⁾「第三は、土地貴族と官僚貴族階級である。前者はただその子孫にいつまでも称号と特権（十分の一税やタイルゲビュール Theilgebühr など）とを世襲させようとはかり努めており、後者はただ自分のことだけを考へてすぐつぎの世代のことさえ考えない点で、両者ともそれぞれ正反對の誤りに陥っているのである。貴族たちにとって、「農民は誰の目にも、自らを養うためには何ひとつ残さずに苦しい奉仕を果さねばならぬ機械でしかなかった」し、「しかもかかる目的にとつては、村落共同体と散在耕園制とはさぶる都合のよいものであった。この制度によれば、役畜である農民の群は、部落のなかに囲い込まれて狼の攻撃から守られる一方、反抗せずに最も容易に毛を剪ったり乳を搾ったりさせるように用意されて、よつてたかつて租税や勤行料や上納金や金納・現物納の地代等々を取り立てられたのであった。農場制度は、ただこの仕事を困難にして、都合の悪い独立心を生みかつ養成するに役立ち得るばかりだったのである。このような事情の下で一般人民の福祉という原理が考えられることはとうていあり得なかったのである。」⁽¹⁹⁾

これらの諸階級は、いずれも現在の農地制度の存続に利益を有する点において同一であり、したがって、リストの構想する農地改革に対する強力な敵対者であった。

そうだとすれば、リストが自らの提起した農地改革に関するプランを、「ドイツの人のうちのそれぞれの階級がいかに烈しく今日における農地制度の徹底的改革に反対しようとも、ドイツこそその実行に最も迫られている国であり、それに最も適している国であり、その特殊な国民的性格によつてそれが最も深く支持されている国であり、またそれが最も大きい利益をもたらすべき国である」⁽²⁰⁾との確信にまで至らしめた現実的な根拠は、リスト自身の視座

Aspect のなかでは、どのような歴史的動向への認識の裡を求むべきであろうか。

最初に考うべきことは、当時西・南ドイツのあらゆる地域がこうした村落共同体と散在耕圃制の基盤の上に成立する零細土地保有¹¹経営でもって蔽われていたのではないという点である。すでに青年時代において、リストはそうした零細経営の蔓延している地域と対照的な、土地整理のゆきとどいた大農経営の発達している地域の存在を明瞭に知っており、後年イギリスやアメリカや、ノルマンディーやブルターニュや、それからスイスの二、三の地方における農地の状態を見ることにより、ますます昔の見解の正しさを確信するようになっていった。事実「土地整理は、ドイツにおいてはもうとくに単なる理論ではなくなっている。ザクセンとプロイセンとは、幾年も前から、これを実行しよう⁽²¹⁾と熱心に試みており、上部シュワーベンではそれ以前から遙かに大規模に実行されていた。」「ドイツの諸大邦のうち、土地整理の利益をまっさきに洞見しかつその実現に考慮を払ったものがバイエルンであったことは、異論のないところである。」⁽²²⁾しかも、バイエルン王国の土地整理は一八世紀末に賢王レオポルドがトスカナ大公領において実行した土地改革の見事な成果を自らの手本として実施されたのである。リストによれば、土地整理の「最初はすでに一七世紀において、ある教会領の領主の特別な奨励によって行われたもののようである。それというのも、……改良や思い思いの土地整理が、すでに眼前に経験として存在していたからである。しかしそれ以来、この処置は主としてその実際の効果によって、おのずから進行するようになった。最初に整理を行った村々のまわりの諸部落は、耕地の合併と改良との好結果を目のあたりに知って、進んでこれを模倣することに決めたので、土地整理はますますさかんに進⁽²³⁾行した」のであった。つきに、そうした土地整理を押し進めた時代の趨勢とでもいふべき生産諸力の発達がみられたことも看過できないことである。まず土地の自然的生産力が人工的方法によって改良されはじめ、休閒地が廢止さ

れ、農地に株草が栽培され、最後に集合耕地 Güterkomplex が解消し単なる手労働によって営まれる新しい耕作がおこなわれるとともに、一方では零細経営の蔓延を招くことにもなったが、ともかく旧来の封建的土地所有は危機の段階に入り、その基盤をなす村落共同体は改良農業の最大の障害となるに至った。⁽²⁴⁾まことに、「村落共同体と散在耕圃制とは昔の社会的・政治的狀態にこそ適合したものであったが、今日の狀態には甚だ矛盾する制度」⁽²⁵⁾なのであり、「その不調和さは、かならずますます大きくなるであろう。」⁽²⁵⁾しかしわれわれはこの場合、こうした土地改革が「ドイツの広い地域にわたって、政府の奨励と支持の結果、すでに幾世紀も前から開始され、最近に至るまで……続けられている」⁽²⁶⁾（傍点引用者）ものであり、当時興隆しつつあった絶対主義国家権力によって支持奨励されたものであること、およびリストが特に記しているように、リストの「農地制度」論の支持者であり、長年の間シュワーベン州とノイブルグとの行政に携わっていたフォン・エッティンゲン＝ワルラーシュタイン公 Fürsten von Oettingen-Wallerstein や、アウグスブルクの行政・財政の参事官であるフォン・シャッハ Judais Thaddäus Schach、さらに当時イラー郡庁の長官であった顧問官フォン・シュティツヒアーナー Hm. von Sticherer、同じく枢密顧問官フォン・ハッツィ Herr von Hazzi といったような土地整理や農場制度の実施に積極的な貴族および開明的絶対主義官僚によって、そうした土地改革が押し進められていた事実をとくに指摘しておきたい。⁽²⁷⁾つぎに、こうした動向とならんで、当時ラインの左岸の農民は大革命以来封建的諸關係の廃止によってすこぶる豊かになっていたこと、および「フランスのスタンプを捺したドイツ自由主義」がその地域に根を下しはじめていたことも注目されなければならないであろう。リストのみるところでは、「今日事物の新しい秩序が地盤を獲ており、あるいは少くとも根を張ろうとしはじめているのである。」⁽²⁸⁾そして、「事物のこの新しい秩序の基礎にあるものは、主として豊かで教養があり、しか

もこれによって自立している中産階級である。」⁽²⁸⁾彼らこそはリストの念願とする有力な国民市民の中堅であり、「ドイツ人の国民的力と国民的自由との担い手」たるべき人々であった。以上ごく大づかみに指摘した諸事態が、零細経営の蔓延という「農地制度の最大の欠陥」という事態に対立しつつ進展しており、リストの豊地改革に関するプランのいわば現実的な背景をかたちづけていたのである。

【注】

- (1) Fr. List, Werke, V. 457. 邦訳、七七一七八頁。
- (2) Ders., a. a. O., S. 458. 邦訳、七八頁。
- (3) Ders., a. a. O., SS. 473—474. 邦訳、一〇三一—一〇四頁。以下幾つか引用するリストの言葉は、直接農民の伝統主義を画いたものではなく、そうした農民の生活を当然のように思いこんでいる世人の偏見を批判したものである。ただ、それを通して農民の生活態度がうかがい知れるので、ここで引照したわけである。
- (4) Ders., a. a. O., S. 474. 邦訳、一〇四頁。
- (5) Ders., a. a. O., 476. 邦訳、一〇八一—一〇九頁。
- (6) ウェーバーもほぼ同様のことを指摘している。Vgl., Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. II. Hinduismus und Buddhismus, 1921, S. 42.
- (7) 身分階層制の意味内容については、川島武宜「農村の身分階層制」(『日本資本主義講座』第八卷所収)を参照。
- (8) 部落生活の封鎖性が共同体を基礎として発生するものである点については、大塚久雄「共同体の基礎理論」、四〇頁参照。Vgl., Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, S. 548f.
- (9) ただし、この現象は一層広くは一つの社会構成から他の社会構成への過渡期とか、植民地社会のような固定的でない社会階層間の移動 mobility がいちじるしいところによくみられるものである。中世初期にもかなり生じた点については、拙稿「ゲルマン的共同体の家族構造」におけるサン・ジェルマン・デ・プレ修道院所領明細帳のデータが示しているごとくである。

(10) ドイツにおいては、こうした側面はかなり後代まで存続したようである。それについては、ヴルツヴァッハーの興味深い研究を参照せよ。G. Wurzbacher, *Dorf in Spannungsfeld industrieller Entwicklung*, 1964. SS. 78—97.

(11) Fr. List, *Werke*, V. SS. 478—479. 邦訳『一一一頁。』

(12) Ders., a. a. O., S. 480. 邦訳『一一五頁。』

(13) Ders., a. a. O., S. 474. 邦訳『一〇五頁。』

(14) Ders., a. a. O., S. 480—481. 邦訳『一一五—一一六頁。』

(15) これを単なる共同体的遺制にすぎないとするか否かは、見解の分れるところであるが、リストがもって認識のモデルとしたヴェルテンベルクは、モーゼルに拠ってみるならば、封建的土地所有の優勢は明瞭であり、単なる遺制になっているとはいえないように思われる。この点は、なお後述。

(16) リストにとって当面最大の敵の一つは、この絶対主義の保守的堡壘によって頑強な抵抗を示すこの官僚階級であったことは、「農地制度」論の行論からも看取できる。たとえば、「農地制度」論の背後に潜むリストの問題意識を示したつぎの言葉を読みよ。「有力な国家市民の数が最も少いのは工業を持たぬ諸国である。ここでは土地所有者の大部分が、巨大な、特権を持つ地主から成っているか、あるいは強い権力を持つ官僚階級に監視されている、貧寒な零細農から成っている。ここで、われわれが問題とするのはこの後者についてである」(*Werke*, V. S. 450. 邦訳『六六頁。傍点引用者。』)

(17) Fr. List, *Werke*, V. S. 484. 邦訳『一二二頁。』

(18) Ders., a. a. O., S. 488. 邦訳『一二六頁。』

(19) Ders., a. a. O., SS. 470—471. 邦訳『九八—九九頁。』

(20) Ders., a. a. O., SS. 433—434. 邦訳『三八頁。』

(21) Ders., a. a. O., S. 538. 邦訳『二〇三頁。』

(22) Ders., a. a. O., S. 538. 邦訳『二〇四頁。』

(23) Ders., a. a. O., S. 492. 邦訳『一三二—一三三頁。Vgl. Ders., a. a. O., S. 465 Anm. 1. 472. 邦訳『九〇頁原注』一〇一頁参照。

(24) Ders., a. a. O., SS. 467—468. 邦訳『九三頁。』

- (25) Ders., a. a. O., S. 469. 邦訳、九六頁。
- (26) Ders., a. a. O., S. 472. 邦訳、一〇一頁。
- (27) リストがこれらの人々と親しくし得たという事実は、リストの立場を理解する上にも、また三月前期のドイツ社会の動向を評価する上にも、きわめて重要な点であるように思われる。ちなみに、本稿で引用された R・モーゼルもこういった開明的な官僚につながる立場であったようである（松田教授の御教示による）。
- (28) Fr. List, Werke, V. SS. 472—473. 邦訳、一〇〇頁。リストの背後にあった中産階級について、「農地制度」論での言及は余りない。そのたちらといった検討は「工業制度」論を分析するときに、はじめてとりあげられよう。さしあたって、小林昇「経済学史研究序説」二〇八—二二五頁、および松田智雄「土地所有と産業資本」における「リストの初期の所論の一切は、……『工業と農業との完全な均衡を保った国内的育成』を基軸とする『国内市場の形成』、それを裏づける、あの苦境と危機の中に立つ工場生産の立場、という視角から理解されなければならない」という独自の評価を参照。（同氏編著「近代社会の形成」二二三頁）。

ところで、以上一瞥したような状況のなかでリストの提起した「農地改革」案は、どのような内容と性格をもつものであったか。それはすでに周知のところであるので、ここでは行論上必要な範囲で簡単に述べておくことにしよう。

彼の「農地改革」案の中心課題は、これまでの叙述からも明らかなように、ジャガ芋経営 Kartoffelwirtschaft の蔑称を有するような零細経営の蔓延を阻止すること、そのためにはそうした普及を助長する原因になっている村落共同体と散在耕圃制を廃棄することにおかれている。⁽¹⁾だが、現実的な政策家であるリストは、その突然の廃止がいたずらに混乱と害悪をよびおこすだけであることを認め、一層包括的な改革案の一環として、しかも漸次的にすすめていくことを提案した。⁽²⁾その場合改革されるべき問題として、つぎの諸点があげられている。（一）保護関税によって商工業を奨励し、農村の増加人口を商・工業部面に定着させる。（二）植民の促進によって過小土地保有者 allzu kleine Grund-

besitzer の数を漸減させること。(三)同時に村有地と国有地とを漸減させること。それはとくに土地整理の機会におこなわれる。(四)村落共同体と散在耕圃制の漸次的な廃棄。(五)土地整理および新らしい農業制度の維持という目的にかんじた法律を国家は制定し、この状態を永久に維持するように考えること。以上である。この改革方法の全体を貫いている意図は、一方商工業の発達促進、他方で植民という二つの局面をふまえつつ、共同体的諸關係を一扫してできるかぎり広汎な土地整理、Güterarrondierung (= enclosure) をおこない、自分の所有地の中央に住み得るような中・小規模の農場制度 Hofverfassung を創りだすことに向けられている。すなわち、「こうすれば今日まだ散在耕圃のなかにも存在している中・小経営を永久に維持し得るばかりでなく、すでに零細経営が蔓ついているところにも再び中・小経営をつくりだすことができる」⁽³⁾。農村の増加人口は土地細分化の阻止から工業部面に流入せざるを得なくされ、かくて農村に剰余生産物が発生し、工業製品に対する需要が増大し、都市と農村の福祉はともに促進され、国家は有能な「中産的」農民層を得ることになる。この「中産的」農民の生活を支える農場は、大体四〇―六〇モルゲンを適当とし、リストの分類からすれば、「小土地所有」の範疇に包摂されるのであるが、⁽⁴⁾当時の標準からすれば、農民層上層にあたる富農層の現実の経営規模にほぼ等しいものであった。⁽⁵⁾そして、全ドイツの農業がこの方法で組織された場合、⁽⁶⁾ほぼ五〇万の農場が創設されることとなる。この土地整理(エンクロージャ)によって、村落共同体と散在耕圃制は清掃されることになるが、それとともに村有地(森林・牧野)も、さらに各種の公有地(国有地も含む)も分割、売却が要求される。また、共同体農民の上に重くのしかかっていたさまざまな封建的諸負担(十分の一税・物納地代・賦役・牧場使用権・各種の地役権)も、この機会に有償的方法に抛りながら直接生産者に有利な仕方を取り除かれなければならない。⁽⁸⁾ただし、リストはこの有償的方法が新農場制度の原則をくずさないかぎりにおいて、という条件をつけ

ている。このようにして成立した中・小規模の農場は、封建的諸負担と共同体から解放されている点で、明らかに独立自由な近代⁽⁹⁾的農場の形成が希求されているとみなすことができる。だが、この新農地制度はつぎのような諸点を法的に保証される必要があった。⁽¹⁰⁾

(一)各農地は完全な経営に必要なあらゆる部分を持ち、少くとも相当な生計を所有者に保証しなければならない。

(二)合併^{エンクローズ}された土地はこの限度までの減少を許されるだけであってそれ以上は許されない。

(三)土地は相続の際に一人の所有に止まるべきであって、相続人の間に分割されたり売却されてはならない。ところでリストの希望するような近代⁽¹¹⁾的農場が創出された暁において、その農場の経営者が同時に所有者であるか、または小作人であるかは、リストにとってどうでもよかった。というのは、近代社会では両者の社会的地位にさほどの差異がないという点ならびに、イギリスの事例で明らかのように土地は必ずしもその所有者によって最もよく耕されるとはいえない事実、および所有者と経営者を同一人とすることは、土地の購入その他経済上他人資本の値入れを強いられ、中産農民に十分な経営資本の不足を惹起せしめること、などから必ずしも経営者が同時に所有者でなければならぬ根拠がないためである。⁽¹²⁾ いずれにしても、この農場システムは地主と小作人の関係を近代⁽¹³⁾的にするとともに、中・小規模の経営に固定されるために高賃金こそ可能であっても、農業プロレタリアート（リストのそれでは日傭人層）を十分に形成する余地をなくしてしまう。そこではむしろ「資本家が同時に地主であり、耕作者が同時に小作人と労働者である」ことが望まれているのである。この農場主・農場経営者こそはリストの構想にしたがえば、「中産的」農民であるとともに、他の中産的市民層とともに広汎な近代⁽¹⁴⁾的市民階級の一翼となり、政治的資格においては「国家市民」⁽¹⁵⁾ *citoyen* として近代⁽¹⁶⁾的な代表制度（国家制度）の基礎となるべき社会層であった。

リストの「農地改革」案の骨子は、ほぼ以上のごとくであるが、いまリストのこの「農地制度」論をわれわれの問

題視角から見なおすときおよそつぎの二つの点が問題として浮びあがってくる。第一はリストの提唱した「農地改革」案によって創出された農地制度の中核体が近代的農場であり、その農場主は中産的農民であるというとき、一体彼らの歴史的性格はいかなるものとして把握せらるべきであるか、という問題である。⁽¹⁴⁾もしこの中産的農民がいうところの独立自営農民であり、分割地農民 *Parzellenbauer* であるとすれば、それこそはまさしく土地整理によって消滅すべき歴史的運命にある社会層であり、それを土地整理によって改めてつくりだそうとするのは、歴史の逆行であり、改革方法の矛盾ではないか、という疑問が生ずる。現実的な政策家をもつてきこえたリストは、ここでは一個の夢想家として登場することになる。だが、果してそうだろうか。われわれは、この問題をいわゆる「分割地土地所有 *Parzeleigentum* 範疇の検討を通じてとりあげることにしよう。つぎに、リストは土地整理（エンクロージャ）⁽¹⁵⁾によって近代的農場の創設を企図しながら、なぜ農業の資本主義化を避けようとしたか、の問題である。たしかに彼ら中・小規模の農場を永続して維持しようと望んだが、しかしその農場に日傭人（農業プロレタリアートを含む）⁽¹⁶⁾が雇傭されその数が増大する可能性を否認したり、またそのことを全然好ましいことでないなどとは考えていなかった。もちろんそこには、理論構想の上で明らかに一つの矛盾が含まれている。とするならば、「農民層分解」の必然性を事実上知っておりながら、リストはどういう根拠からこうした農場システムを固執したのであろうか。この事実認識と理論構想の乖離は、現実政策上の顧慮をこえて、深くリスト自身の理論構想にみられる独自の性格のなかからさぐりだされなければならないであろう。⁽¹⁷⁾つぎに、これらの問題について若干の分析を試みることにする。

〔注〕

(1) Fr. List, Werke, V. S. 483. 邦訳、一一九頁。この点が彼の「農地改革」の基本線であることは、「農地制度」論の全篇

にわたつてくりかえし強調されている点からみても、明らかであろう。

- (2) Ders. a. a. O., S. 483. 邦訳、一二〇頁。
- (3) Ders., a. a. O., S. 450. 邦訳六七頁。
- (4) リストは土地所有をその規模によつてつぎのように分類している。「大土地所有とは例の工場的に拡大された農業をいつているのであつて、このばあい生産者はその生産物のごく一部を消費するだけである。中土地所有とは八〇アッカーから二〇〇アッカーの土地を経営するものをいい、小土地所有とは少くとも一隊の犁を完全に働かせる、二〇モルゲン〔アッカーと同じ〕から八〇モルゲンまでの土地の経営をいつている。零細経営 *Zergerwirtschaft*〔侏儒経済〕とは、犁を鋳に代えたり借犁によつて働いたりする農地経営を、ここにさう名付けるのである」(Werke, V. SS, 434—435. 邦訳、四〇〇頁)。
- (5) 松田智雄「土地所有と産業資本」二〇七頁。それは現実には商業的経営として構成される。
- (6) Fr. List, Werke, V. S. 547. 邦訳、二一八頁。
- (7) Ders., a. a. O., SS. 488—489. 邦訳、一二六—一二八頁。
- (8) Ders., a. a. O., SS. 535—537. 邦訳、二〇〇—二〇一頁。
- (9) この点のなちつた検討は次節においてなされる。
- (10) Fr. List, Werke, V. SS. 530—531. 邦訳、一九二頁。リストがこのように国家の手で維持されることを望んだ点は、彼の構想に多くの疑点を残すことになった。
- (11) Ders., a. a. O., SS. 439—441. 邦訳、四七頁。
- (12) Ders., a. a. O., S. 455. 邦訳、七五頁。
- (13) Ders. a. a. O., SS. 449—450. 邦訳、六五—六六頁。リストによれば、国家市民はつぎの諸階層のうちに求められている。(A)富裕で教養のある商人階級、(B)有力な工業の指導者・補助者および運営者、(C)資本の利子によつて生活を営む者、(D)官吏、ただし上級者の気ままに左右されず、またその仕事に高度の教養を必要とする者、(E)精神的生産一般、ただしその精神的生産または物質的資産から収入によつて自立している者、(F)富裕な土地所有者。リストによれば、これらの社会層は「ゆたかに教養があり、しかもこれによつて自立している中産階級 *Mittelstand*」(Werke, V. S. 472. 邦訳、一〇〇頁)なのである。

(14) リストの「農地制度」論に関する開拓的な業績というべき小林教授の諸研究の重要な論点の一つは、ここにおかれている。以下筆者の試みる貧しい分析も、こうした研究史を念頭においてなされている。

(15) この問題は、第一の問題と深く絡みあっているのであるが、第一のそれが究極において実証の問題に帰着せしめられる性格のものであるのに対して、これはむしろリストの理念構想自体のうちに孕まれている矛盾の問題である点において、分けて考えるべきであろう。

(16) この点は、彼の主観的意識の域内では、リストがイギリスの資本制大農場の発展のうちに発現したプロレタリアートに対して抱いた潜在的な恐怖感と必ずしも矛盾するものではなく捉えられている。

(17) これの一層たちいった検討は、実は本稿の域を超える問題を蔵しているが、ここでは「農地制度」論に現われているかぎりでのリストの理論構想の分析に限定しておく、本稿のテーマを解明する上には、さしあたってそれで充分と思われるからである。

—(一九五七・九・三〇)—